明智光秀の正室熙子と側室ふさ

2024 年 2 月
我部山　民樹

はじめに

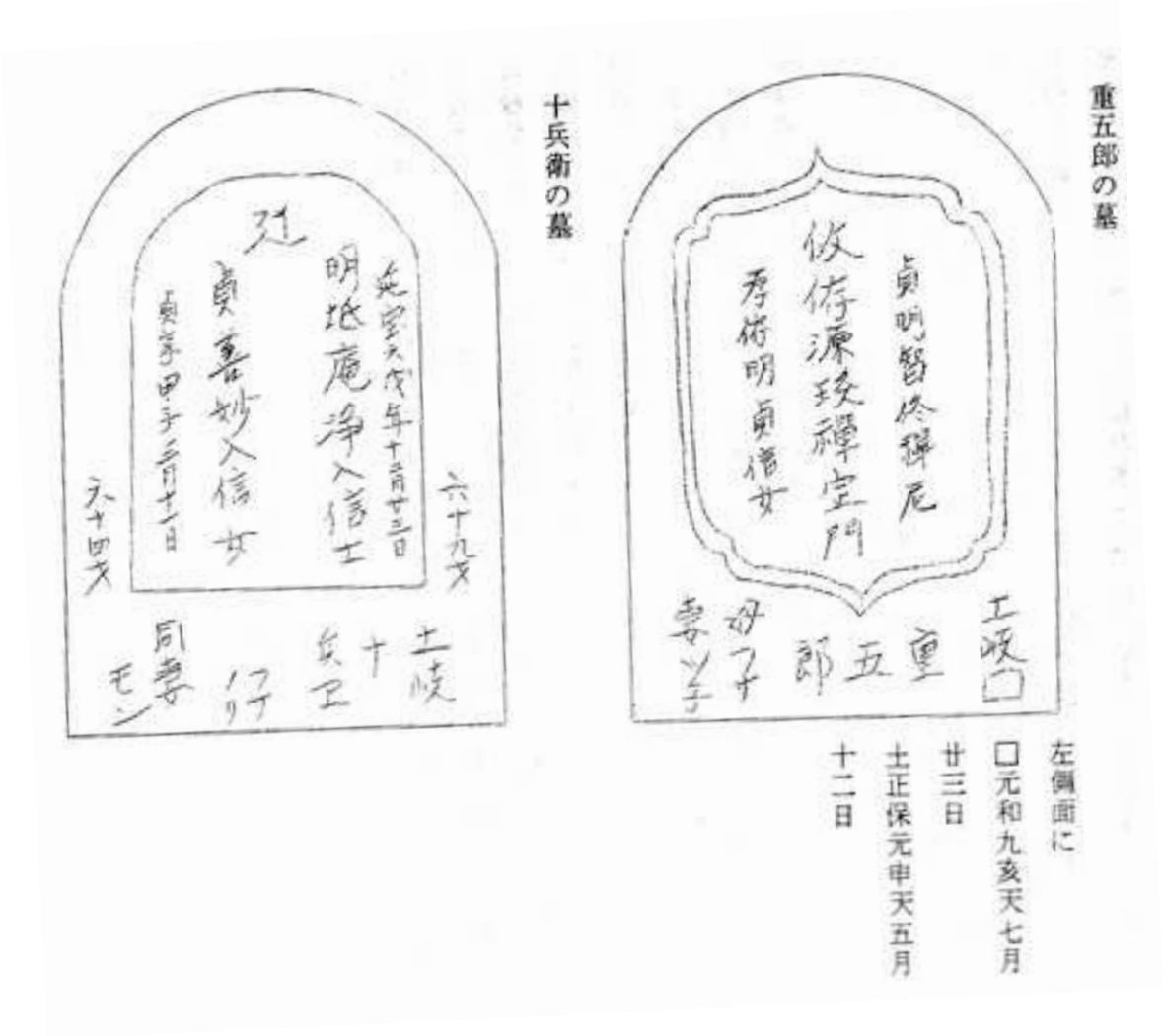
明智光秀の正室・熙子は糟糠の妻といわれ、光秀は熙子を大切に思い、側室を持たなかったとされる。しかし、千葉県市原市の不入斗（いりやまず）に『明智光秀側室の墓』と伝わる墓がある。それには『土岐重五郎』、母『ふさ』、妻『つね』の名とその戒名が刻まれているが、ふさの戒名は明智との繋がりを示すような『貞明智佟禪尼』とあり、さらに没年と思われる元和九年（1623 年）九月廿三日が刻まれている。そしてその隣には『土岐十兵衛ふさのり』と妻『もん』と読める銘が刻まれている墓が立っている。周辺には子孫代々の墓があり、その中には明智家の桔梗紋が刻まれた墓もある。今もそれらの墓を明智光秀の末裔と名乗るご一家が守っておられる。

また、市原市の不入斗には光秀の側室を西光院まで護衛して来た齋藤利治の子孫を名乗るご一家が住まわれていて、その伝承が語り継がれている。

このことは最近になり大室晃氏やいちはら市民特派員を介してそのご一家の方々により公開されたものである。

○光秀側室の墓と伝わるご一家の墓

○重五郎と十兵衛の墓（大室晃氏による）



いったい、このふさなる女性は明智光秀やその妻・熙子とどのようにかかわり、いかなる人生を辿ったのであろうか。史料が一切無いので、大室晃氏の著書「伝明智光秀側室の墓」に記載されている墓に刻まれた名前と戒名と子孫を名乗る方々の伝承をベースとして、それに加えて、いちはら特派員のレポート「「麒麟がくる」の明智光慶のお墓を訪ねて」及び「「麒麟が来る」の明智光慶とフサの方が暮らした西光院」を参考にして、ふさなる女性の人物像や辿った人生を小説風に仮想してみる。

1．熙子、明智光秀と結ばれる

天文 18 年（1549 年）の秋、明智家から美濃国（現在の岐阜県）・妻木郷（現在の土岐市）の郷士武将・妻木勘解由左衛門

範熙（つまぎかげゆざえもんのりひろ）のところに「ご息女・熙子（ひろこ）さまを光秀の妻にもらい受けたい」と縁談話がもたらされた。熙子 19 歳、明智光秀 22 歳のときである。範熙の兄は妻木城の城主・妻木広忠で、範熙はその重臣である。妻木家は明智家の家臣だが、その一族でもある。

熙子が幼いころ、明智家の一族郎党が祝い事や法事で集まったときに子供同士でよく遊んだ。それで熙子も光秀と顔なじみとなり、その頃からお互いに好意を持つようになった。幼い初恋であったが、その後も熙子は光秀に少なからず好意を持ち続けている。しかし、この縁談話が持ち上がる少し前に熙子は痘瘡（とうそう、天然痘）に罹り、一命を取りとめたものの左頬に痘痕（あばた）が残っていたのだ。熙子は「叶うことなら光秀様と添い遂げたいのじゃが、頬の痘痕が気にかかるので恥ずかしい。わらわの代わりに妹の芳子を嫁がせてくだされ」と両親に願い出た。明智家との縁談を無にしたくないと思った熙子の両親は、明智家に事情を説明した上で「熙子ではなく、妹の芳子を嫁がせたい」と申し出たが、光秀は「人の容貌はすぐに変われども、人の心の美しさは変わらぬ。芳子様ではなく熙子様を妻にもらい受けたい」と妻木家に申し入れた。熙子は感銘を受け、「この人となら一生苦楽を共にできる」と思い、心を決めた。光秀は幼いころからの熙子への愛おしさを忘れられず、縁談話を持ち込んだのであった。

2.「糟糠の妻」熙子、光秀の栄達を支える

熙子が嫁いでから数年が経ち、光秀一家は越前国に逃亡する羽目になった。光秀の叔母が美濃国の斎藤道三の夫人だったので、光秀はその縁を頼って道三に仕えていたが、弘治 2 年（1556 年）、道三がその息子・斎藤義龍と争った「長良川の戦い」が勃発し道三が討たれてしまい、明智光秀の明智城も義龍に攻められ落城したので、明智家は母方の親戚を頼り越前国へと逃れることにしたのだ。このとき熙子は身重の身体だったので、光秀は「住むところが無くなっただけでも不安じゃろうに、そのうえ身重の身体ではこの山道は無理じゃ。背負ってやる」と言って、お腹の子に障らないように熙子を仰向けに背負って油坂峠を逃れた。熙子は光秀のその優しさに感動し、「この人を支えるためなら、どんなことでも出来るし、しなければならない」と思った。

明智家一行は何とか越前国に辿り着いたが光秀の士官先はなかった。が、光秀に越前国の当主・朝倉義景の家臣と連歌会を行なう好機が訪れた。しかし主催者の光秀が用意しなければ

ならない酒宴などの資金がない。見かねた熙子が「わらわが何とか工面しまする」と言って、つやつやとした長い黒髪を売ってその資金を用立てた。丈なす美しい黒髪は美人の条件であるが、それ以上に熙子は頬の恥ずかしい痘痕を隠すために長い髪が必要だったのだ。が、「痘痕を隠す髪より夫を支えることの方がはるかに大事」であると思ったのである。おかげで連歌会は成功し、面目を施した光秀は朝倉家に士官することができた。後に熙子が「糟糠の妻」と言われるようになる所以である。そして光秀は次第に取り立てられていった。

永禄 8 年（1565 年）5 月 19 日、第 13 代将軍・足利義輝が殺害されると、義輝の弟・覚慶は興福寺を脱出し越前国に逃れ、将軍になろうと義昭と改名し、上洛を企て朝倉義景に接触する。が、義景が動かないので義昭は織田信長に接近し、結果、永禄 11 年（1568 年）、義昭は信長に擁されて上洛を果たして第 15 代将軍に就任した。光秀が優柔不断な義景を見限って、義昭に鞍替えし、義昭と信長の間を取り持ったのである。さらに光秀は、主君を足利義昭から織田信長に鞍替えした。そして光秀は次々と武勲を挙げていき、元亀 2 年（1571 年）信長の命で坂本城の築城を開始、その後坂本城を拠点に戦いに明け暮れていたが、それに伴い熙子も忙しくなってきた。

3．ふさ、熙子に仕える

天正元年（1573 年）春、熙子の父親・妻木勘解由左衛門範熙が、その家臣の妻木三郎右衛門のところに来て「熙子が忙しくなって来たので、ご息女を奥女中として坂本城の熙子に仕えさせてもらいたいのじゃ」とふさに白羽の矢が立って、すぐに熙子に仕えることになる。ふさ 16 歳で、熙子 43 歳のときである。

熙子に初めて会ったとき、ふさはその美しさと気品の高さに驚き、「明智の妻こそ天下一の美女とは噂通りじゃ。お歳を重ねてもそれを彷彿させるものがある。頬の痘痕を気にされていると聞いたことがあるが、長い黒髪に隠れているのだろうか、見た目には分からない」と思った。そして夫婦仲の良さを示すいくつかの逸話を耳にするようになった。「熙子様はお館様に尽くしながら、その一方でお館様の計り知れないほどの深い愛に感謝しているに違いない、お二人は強い絆で結ばれている」と確信し、このような夫婦関係をうらやましく思った。やがて熙子自らがふさに城内のしきたりや作法を教えようになるが、熙子の優雅な所作を見るにつけ、ふさは次第に熙子に憧れを抱くようになった。

天正3年（1575年）の春、熙子がふさに「明智家を絶やさないためにはもっと世継ぎ候補の男子が必要じゃ。殿とわらわの間には、11歳の長男・十五郎と9歳の次男・十次郎の二人しかいないので、殿の側室になって世継ぎの候補になれる男子を産んで欲しいのじゃ」と懇願した。ふさが坂本城に来て2年目のことである。さらに、「わらわは、側室を持とうとしない殿に感謝しつつも世継ぎの方が心配なのじゃ。そなたを奥女中に迎えようとした2年前、わらわはすでに43歳で、もう子を産むことを諦めざるを得なかったのじゃ。そなたを仕えさせたのは、実は遠縁の女子（おなご）を殿の側室にし、男子を産んで欲しいとの思いで、まず手始めとして奥女中として仕えさせ、わらわの目に叶えばいずれ殿の側室にするつもりじゃったのじゃ」と続けた。熙子は、「娘三人はできがよくて、どこに出しても恥ずかしくないが、それに引き換え、息子二人は、武芸はそこそこで身体がそれほど丈夫でない。このままでは明智家が断絶するやもしれぬ」と思っていた。熙子の娘たちは、長女・倫子が有岡城の城主・荒木村重の嫡子・村次に嫁ぎ、次女・菊子が織田氏の連伎衆で信長の甥・津田信澄に嫁ぎ、特に華のある三女の玉子は勝竜寺城の城主・細川藤孝の嫡男・忠興との縁談話が持ち上がっていた。

実のところ、ふさは歳を召しても端正な顔立ちで心優しい光秀に心惹かれているが、光秀を心から愛し必死に支え続ける熙子、側室を持たずに熙子を大切に思う光秀のことがよく分かっているので、「とてもお引き受けできない」と思い、そのときは丁重に辞した。武将が複数の側室を持つのが当たり前の世の中とはいえ、我が子の行く末より、世継ぎの担保を優先し夫の側室のお膳立てをする熙子をふさは不憫に思った。

4．熙子逝去し、ふさが側室に

天正4年（1576年）の一向一揆の戦いの後、光秀が風痢（赤痢）に罹り、生死をさまよったので、ときの名医曲直瀬道三（まなせどうさん）に診てもらった。一方、熙子は明智家の菩提寺の西教寺に何度も足を運び、光秀の病気平癒を祈願した。そして自ら寝ずの看病をし、皮袋に入れた水枕の水を取り換え、水や薬を口移しした。その甲斐あってか3日目に光秀が目を覚まし「おおっ、熙子か！」と、「お気が付かれましたか！」と熙子。二人はとめどなく涙を流し続けた。光秀は回復に向かうがなか

なか治らなく死亡説が流れたほどだが、幸いにも二か月ほどで快復した。

その看病で熙子が疲れたのだろうか、それとも病がうつったのだろうか、今度は熙子が倒れてしまった。光秀が仲のよい、京の吉田神社の神職で公卿でもある吉田兼見に祈祷をお願いし、熙子は投薬と養生を続けていたが、徐々に食事を受け付けなくなり、みるみるうちに弱っていった。そんな中、病の床の熙子はふさを呼んで「わらわのたっての願いじゃ。殿の寵愛を受けて、男子を産んでもらいたいのじゃ。くれぐれも頼み申す」と遺言を残し、そして光秀には「わらわは殿と結ばれてとても幸せじゃった。子供たちのこと、くれぐれもよろしゅうお頼み申しまするぞ」と言ってからしばらくして、光秀の「熙子、熙子―」という必死の呼びかけに応ずることもなくなり、あの世に旅立ってしまった。享年 46 歳であった。

熙子の「側室になるように」とのふさへの遺言を一緒に聞いていた光秀だが、熙子の 3 回忌が終わるまでは「ふさ」に何も言わなかった。

天正 6 年（1578 年）の秋、熙子の 3 回忌を終えたことで、光秀は世継ぎのことも考え、元々魅力を感じていたふさを呼び出し、「熙子の遺言があるからだけではない。是非わしの側室になってもらいたい」と言ったので、ふさは以前から光秀に惹かれるところもあり、憧れの熙子のたっての願いでもあるので応じた。ふさのことを「ふさの方様」と呼ぶものもいたが,「奥方様」と呼ぶものもいた。やがて子を宿したことが分かり、夢のように幸せな日々を過ごしていたふさだが、天正 10 年（1582 年）6 月 2 日の朝、早馬にて坂本城に驚天動地の知らせが入ってきた。

「早朝にお館様が京都本能寺に滞在中の織田信長様をお討ちなされた」という知らせだ。光秀が出立のとき「わしはこれから信長様に従って中国征伐に向かうのじゃ」と言っていたので、ふさはその知らせを聞いて何かの間違いではないかと思ったが、重臣・明智秀満の奥方・倫子に確認し、やっと本当のことだと分かった。かつて荒木村重・村次親子が信長に謀反を起こした時に、村次が倫子を坂本城に返していたのだが、この時には秀満の妻になっていた。

しかし何故に光秀が謀反を起こしたのかは誰にも分らず、人々がいろいろと噂しているが、いずれも納得のいくものではなかった。

5．光秀が逝去し、ふさは上総国へ

やきもきした日が続いていたふさのところに、十日の昼過ぎになって突然光秀がやって来て、「久しぶりじゃのう、先ほど秀吉が備中高松城から京に取って返しているとの知らせが入った。思いのほか早く引き返しているので、ほどなく一大決戦となろう。正直なところ、存外味方が集まらないのでこの先どうなるか分からぬ。わしの子を宿しているそなたは逃げ延びて、やがて生まれて来る子を立派に育てて欲しいのじゃ。もしも我が軍が破れ、そなたがここに留まっていれば、子を宿していることを秀吉軍に知られ、殺されてしまうじゃろう。逃げ延びれば、そなたがわしの子を宿していることを秀吉軍に知られることが無く安全じゃ。そして生まれてくる子が男の子であれば、その子に当家を再興させてもらいたいのじゃ。明智の出自である土岐家は斎藤道三に美濃を追われたが、その同族が上総国夷隅郡（かずさのくにいすみぐん、現在のいすみ市）の万喜城（まんぎじょう）を居城としている。城主・土岐頼春殿に書状をしたため早馬を飛ばし、そなたの世話をお願いした。必ず了解してくれるはずじゃ。そなたの上総国までの旅に参謀格の家臣・齋藤利満・利治親子を護衛につける。すでに齋藤親子にはその旨申し付けてあるので、後は齋藤親子に任せばよい。我が軍が勝利すれば、すぐに迎えをよこす。ふさ！さらばじゃ」と言ってあわただしく去っていった。ふさは「もっと話をしたいし、謀反の理由も聞きたい」と思ったのだが、とてもその雰囲気ではなかった。そして早々に上総国に旅立つ準備をし始めながら、「本能寺での事変が起こってからまだ８日しか経っていないのに、はるか彼方の備中で高松城攻めをしていると伺っていた秀吉様が、そんなにも早く京に戻って来ることが出来るのじゃろうか、それにお館様が負けるはずがなかろうに」と思い、まだ半信半疑であった。

そして６月 13 日、摂津国と山城国の境に位置する山崎で、備中高松城から引き返してきた羽柴秀吉の軍勢と、明智光秀の軍勢が激突したが、その夕刻に明智勢は総崩れとなった。光秀は、脱出し坂本城を目指して逃亡したが、その途中で死没した。

その日の夜遅くに、斎藤利満・利治親子がふさのところにやって来て、「奥方様、殿が敗走の途中落武者狩りに傷を負い、思いのほか深手だったことで、自刃されたとの知らせが参りました。かねて殿に命じられておりましたように、奥方様を上総国に案内申し上げるので明朝の寅の刻にお迎えに上がりまする」と言上した。

その知らせを聞いて、不幸のどん底に叩き落されてしまったふさだが、光秀の忘れ形見を立派に育て、男子ならお家再興を

成就させなければならないという使命があるので、いつまでも悲しんでいるわけにはいかなかった。
ふさは翌日の未明に齋藤利満・利治親子の護衛で、従者の太助とともに坂本城を発ったが、上総への出立の前に菩提寺の西教寺に立ち寄った。昨夜のうちに知らせを入れておいたので住職は書院にてお茶を用意して待っていてくれた。ふさが光秀を弔った後、住職が剃髪をしてくれて、出立の際「人はみな平等に成仏できる。光秀様も成仏なされたので安心なされ。奥方も大変な思いをされたのじゃろうが、これからは生れてくるお子を立派に育てることを生きがいにして、何事にも感謝の気持ちを持ち続ければ、きっと幸せになれるじゃろう。それではお気を付けて行きなされ」と合掌して見送ってくれた。ふさは住職の励ましに心より感謝し、「お世話になり申した。わらわも達者に暮らしまするので、ご住職様もくれぐれもお達者で」と挨拶をし、尼僧姿で出立した。
太助はふさが坂本城に仕えるときに連れてきた実家の中間（ちゅうげん）で、とても重宝していた。
ふさの去った坂本城だが、安土城の守備に就いていた明智秀満が 13 日の夜に「明智勢が総崩れとなり敗走した」との知らせを受けて、14 日の未明に安土城を発ち、ふさと入れ替わるように入城した。入城直後に秀吉勢に城を包囲され、秀満はしばらく防戦したのち、その日の夜に十五郎と十次郎を刺し殺し、そして自分の妻・倫子も刺し殺してから自刃し、明智家は滅んだ。
ふさの一行は上総国市原郡の西光院（さいこういん）に向かった。出立直前に、上総国の土岐家より利満に書状が届いて、それには「土岐家は安房国・上総国の里見氏と長年争っていて、里見氏とその同盟の上総武田氏に城攻めをされているさなかであり、今こちらに来ると争いに巻き込まれるやもしれぬので、しばらく土岐家に縁のある上総国市原郡不入斗（いりやまず、添付地図参照）の西光院に留まってもらいたい。いずれ土岐家より迎えをよこしまする」とあったのだ。
出立の 3 日後に妻木広忠から利満のもとに「坂本城が落城し、籠城していた明智一族が自刃した」との知らせがもたらされたので、一同で黙祷を捧げた。その後、広忠が西教寺で関係者一族の墓を作ってから墓の前で自害したことをふさ一行は知る由もない。
ふさは悲しむ暇もなく尼僧姿で、利満親子は武士であることを目立たせないように蓑を被り、太助は従者のいで立ちで、一行は旅を続けた。さらには言葉付きで怪しまれないように終始無言を貫いた。が、江戸の戸塚っ原に差し掛かったところで、

利満が秀吉軍の追手に捉えられてしまったが、利満が盾になったおかげで利治は逃げ延びることが出来た。尼僧姿のふさと従者姿の太助は追手の対象ではなかったようで捉えられることは無く、利治と離れ離れになりながらも命からがら、無事に西光院に辿り着くことが出来た。

6．西光院でのふさ

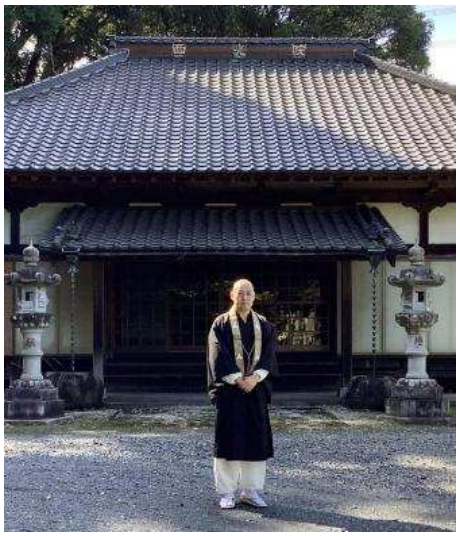
西光院（添付地図参照）は、江戸湾の椎津湊（しいずみなと、添付地図参照）に流れ出る椎津川（添付地図参照）の畔の、背に小高い丘陵地が控えている里山にある。その丘陵地は椎津川と並行して江戸湾を望む台地まで連なっている。

西光院の周辺は草深く、猪や鹿が時々現れる田舎だが、命からがら逃れてきたふさにとってはまるで天国のように思われた。

しばらくして利治が「奥方様、ご無事で何よりでした。」と言いながら西光院に到着してきたので、ふさは「そなたこそご無事でよかった。本当に心細かったがこれで安心じゃ」と言いながら再会を喜び合った。が、利満が追手に捉えられた後に殺されてしまったことを聞かされ、ふさは、利満が自分のために命を落としてしまったことがとても悲しく、来る日も来る日もお祈りし、利満を弔った。

一方、利治は上総土岐家の計らいで隣村の片又木村に家と田畑を手に入れたので、農作を行いふさの生計も支えるようになる。

○現在の西光院



ふさは、住職の青覚和尚より「西光院の宗派は新義真言宗で紀州の根来寺を本山としている。わしは土岐家の元家臣でわけ

あって出家し根来寺で修行したのち、美濃国のある末寺で世話になっていたが、上総土岐家の誘いを受けて、西光院の住職になったのじゃ」と説明を受けて、やっと上総土岐家と西光院の関係を理解することができた。

あるとき、ふさが和尚に「ここに逃れて来る途中、駿河に差し掛かったところで、眼前に広がる雄大な富士の山を見て、その気高くて崇高な美しさに感動し、とても癒されました。恐怖に慄きながら逃げてきた所為か、旅の途中のことはなかなか思い出せないのじゃが、富士の山だけが思い出され、是非、もう一度見てみたいと思いまする」と言うと、和尚が「寺の背の丘の向こうの海の彼方に富士の山が聳えているのじゃが、それを見るには海に面した高さ百尺ほどの台地にある富士見坂に行けばよい。行き方じゃが、椎津川の土手道を下って行くと、川間橋（添付地図参照）に出る。そこを左に折れ、なだらかな坂を上っていくと右のほうに椎津城（添付地図参照）の櫓が見えてくる。そこを通り過ぎて、すぐに右に折れて少し行くと下り坂に差し掛かるが、そこが富士見坂（添付地図参照）じゃ。そこからは海の彼方に広がる富士の山を眺めることが出来るのじゃ。女子(おなご)の足でもここから四半ときはかからんじゃろう。秋晴れの天気のよい日には、青空に浮かぶ富士の山が見え、目を右のほうに向けると筑波山も見える。尤もそなたは筑波山には興味が無いじゃろうが」と高笑いをした。

ふさは、稀に見る秋晴れのある日、太助を伴って富士見坂に行った。雲一つない青空に雪化粧の始まった富士の山が海のかなたにくっきりと広がっている。駿河で見たときよりいっそう美しい富士の山にふさは感動し、「駿河なる　富士の高嶺は　見れど飽かぬかも」という万葉歌の一節を思い浮かべながら時の経つのも忘れ、しばらくその余韻に浸った。富士の山は自分の心の拠り所だと思い、終生ここに数えられないほど足を運ぶことになる。

この頃までにふさは青覚和尚に具足戒を受けて、出家し禪尼となっていた。そして翌年の１月、ふさは無事男子を産むが、名前はお家再興のときにふさわしい名でなければならないと思い、今は亡き光秀の長子・十五郎の名に因んで、重五郎と名付けた。もし再興できなくても子孫に光秀の血が流れていることを伝承しなければならないと思うふさは、いずれ明智家の出自の土岐姓にあやかり、土岐重五郎と名乗らせるつもりであった。

お寺の前を流れている椎津川の川幅はお寺の付近で 7～8 間ほどあろう。春には川べりに菜の花と桜がともに咲き誇り花見を楽しむことが出来る。夏になれば重五郎と川遊びや蛍狩を楽

しむことが出来る。歩いて四半ときのところにある椎津湊の海辺は遠浅で、潮が引くと一里ほど先まで歩いて行けるのでしばしば重五郎と潮干狩りをして楽しんだ。この海辺は四季を通してエビ、カイズ、アイナメ、ウナギ等の浅海の小魚がたくさん遊泳していて海の幸に恵まれている。ひょっとして素手で拾えるのではないかと錯覚するほどに漁は簡単なので農民が農作のかたわらに漁を行っていて、ふさにお裾分けをしてくれる。秋は紅葉が素晴らしい。妻木郷や坂本城での戦に明け暮れた不安な日々を、ふさがすっかり忘れてしまうほどにこの地は居心地がよく、親子でこの平穏な暮らしを享受できることに日々感謝した。しかし、決して明智家再興の使命を忘れたれたわけではなかった。

天正 18 年（1590 年）5 月、その平穏が突然打ち破られた。椎津城で戦いが始まったのだ。ふさにも戦いの喧噪がしばらくの間聞こえていたが、やがて静寂が戻った。

数日後、和尚から「椎津は豊かな穀倉地帯に臨んでいて、武蔵・下総から上総・安房に通じる房総往還道や久留里街道西往還、それに椎津湊を抑える水陸交通の要衝の地なので椎津城をめぐる争奪戦が幾度となく繰り広げられてきたが、北条方が抑えてからは平穏じゃった。前の月、秀吉軍の小田原城包囲が始まったが、並行して北条氏領土の掃討攻略戦も行われ、椎津城も秀吉勢に攻撃され、この城を守っていた白幡六郎は敗走し、市原郡白幡まで逃げたが、そこで討ち死にした」と聞いて、ふさは平穏と思っていたこの田舎にも戦乱の波が押し寄せていることに驚いた。

○椎津城跡

○椎津城鳥観図

椎津城が落城して双月ほどして小田原城の北条氏直が秀吉に降伏する。

7.ふさ、西光院を出て百姓になる

椎津城落城とほぼ同時期、上総国夷隅郡の万喜城が落城し、上総土岐氏が滅亡した。秀吉による「小田原征伐」に伴う掃討攻略戦で、北条氏に見方した上総土岐氏は秀吉勢に攻め滅ぼされてしまったのだ。行き場所の無くなったふさは、この地で骨を埋める決心をする。重五郎も８歳になり、いつまでも西光院に世話になるわけにはいかず、またいつまでも利治の支援に頼るわけにもいかないので西光院を出た。その際に重宝していた太助を郷里の家族のもとに帰した。太助とその家族のことを思いやったのである。

利治の計らいで、ふさは西光院とは目と鼻の先のところに家と田畑を手に入れることが出来た。これまでも近所の田畑を手伝って野菜等をお裾分けしてもらっていたふさだが、この際百

姓となり農業で生計を立てることにした。重五郎にも百姓として生計を立てられるように今から手伝わせることにした。

同時にふさは幼い重五郎に「そなたの父は有力な大名の明智光秀様で、わけあって明智家は滅亡してしまったが、そなたにお家再興をしてもらいたいのじゃ、そのために武士としての嗜みや武芸を身に着けることが必要じゃ、寺の裏の丘で密かに武芸の手ほどきを利治に受けておくれ」と諭した。そして「このことは家族だけの秘密であり、決して口外しないこと、そして月ごとに姉埼神社（あねさきじんじゃ、添付地図参照）詣でをして、心願成就を祈念しなされ」と命じた。訊きたいことが山ほどあるはずだろうが、このとき重五郎は「分かりました」とだけ返事をした。ふさはおいおい明智家滅亡のわけとお家再興の使命を丁寧に説明していくつもりだ。

姉埼神社は江戸湾を望む百五十尺ほどの高さの宮山台にある。西光院から椎津川の土手道を下り、川間橋のところを右に折れてしばらく行ってから、宮山台を登っていくと四半ときちょっとで姉埼神社に辿り着く。姉埼神社は「景行天皇 40 年（110 年）日本武尊（やまとたけるのみこと）御東征の時、走水（はしりみず）の海（浦賀水道）で嵐に遭い、お妃の弟橘姫（おとたちばなひめ）の犠牲によって無事上総の地に着かれた。この宮山台において、お妃を偲び、かつ舟軍の航行安全を祈願し、風神志那斗弁命（しなとべのみこと）を祀ったのが創始」と伝わる。

○現在の姉崎神社

「幼い重五郎にこれらを強いるのは酷かもしれない」とふさは思いながらも、自分も利治もいつどうなるか分からないし、お館様の願いを成就するためにはやむを得ないことだと心を鬼にして命じたのだ。

そうした暮らしを続けているうちに世の中がすっかり平穏になり、いつの日か、重五郎は精悍な若者に成長していた。

8. 重五郎の結婚、そして孫の誕生

慶長 13 年（1608 年）、ふさは 49 歳、重五郎は 26 歳となっていた。徳川秀忠が 2 代将軍になって 3 年、すでに隣村の姉崎村（添付地図参照）に姉崎藩一万石が立藩され、藩主は徳川家康の孫･松平忠昌であり、この地の体制もすっかり安定していた。ふさは「もうお家再興の夢はもう潰えてしまった」と思った。そんなとき、ふさは重五郎に「神社で出会った娘と恋仲になったが、是非添い遂げたいのじゃ。小豪族・根本七郎右衛門の娘で名前はつねという」と打ち明けられた。重五郎は、農作業の合間に相変わらず姉埼神社詣でを続けていたが、その時に偶然出会った娘と恋仲になっていたのだ。「重五郎の願いを是非かなえさせてやりたい」と思ったふさは、この地の指折りの豪農になっていた利治に婚儀を取り持ってもらうように頼み込んだ。人脈のある利治の骨折りで重五郎はこの年の秋に婚儀を執り行う運びとなり、ふさは利治に感謝するとともに「これでお館様の血が受け継がれる」と思って、ほっとした。

そして慶長 15 年（1610 年）9 月、子宝にも恵まれ幸せに暮らしていた利治があの世に旅立ってしまった。ふさは、とても頼りにしていた利治がいなくなってすっかり途方に暮れてしまったのだが、まるで利治の生まれ変わりのように重五郎に男子が生まれたので、「新しい命を守り、子孫に『明智光秀末裔』の伝承をつないでいく」という使命感が湧いてきた。そしてふさは、愛しい孫に自分の名・ふさをつけてふさのりと命名し、いずれ「明智十兵衛光秀様の名にあやかり、土岐十兵衛と名乗らせよう」と思った。

9. ふさ、あの世に旅立つ

慶長 20 年（1615 年）、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡した。

身近な人が理不尽に死んでいく戦にうんざりしていたふさは、これで徳川政権がさらに安泰になり、これからは戦の無い平和な世の中になると喜び、親子三代の平穏な暮らしを享受することにした。

ふさは、椎津の浜辺に重五郎、つね、そして 6 歳になっていたふさのりを誘って潮干狩りや貝拾いにしばしば出かけた。ふさは「おばあ、一緒に貝拾いしよう」と慕ってくれるふさのり

が可愛くて仕方が無く「もっと長生きして、この子が立派に育つのを見届けたい」と切に願うようになった。その後も潮干狩りや四季の移り変わりを愛でるなどして、親子三代で楽しい時間を享受できることに感謝しながら、平穏な日々の幸せをかみしめていたふさだが、徐々に身体が弱ってきて、ついに元和 9 年（1623 年）の春ごろに死期を悟った。「謀反人・明智光秀」に対する世間の風当たりは相変わらず変わっていない。「お家再興はもうどうでもよい。重五郎、ふさのり、そして子々孫々が幸せに暮らしてくれさえすればそれでよい」と思い始めてからも、ふさは「世にどう思われようと、お館様は立派なお方であり、我が子はその血を引いている。我が子孫にはその誇りをもって生きてもらいたい。我が子孫に『明智光秀末裔』を伝えるのは自分に課せられた使命である」との思いは終生変わらず、万感の思いをしたためた手記を重五郎に託した。そして元和 9 年（1623 年）7 月 23 日、ふさは枕元に重五郎、つね、ふさのりを呼び寄せ「そなたたちと暮らせて、わたしはとても幸せじゃった。わたしの戒名は明智とのゆかりを示す貞明智佟禪尼とし、それを墓石に刻んでおくれ。重五郎は土岐重五郎、ふさのりは土岐十兵衛と名乗っておくれ」と遺言し、やがて、ふさのりが泣きじゃくりながらかける「おばあ！」という呼び声にも応じなくなり、皆に看取られながら息を引き取った。享年 66 歳であった。

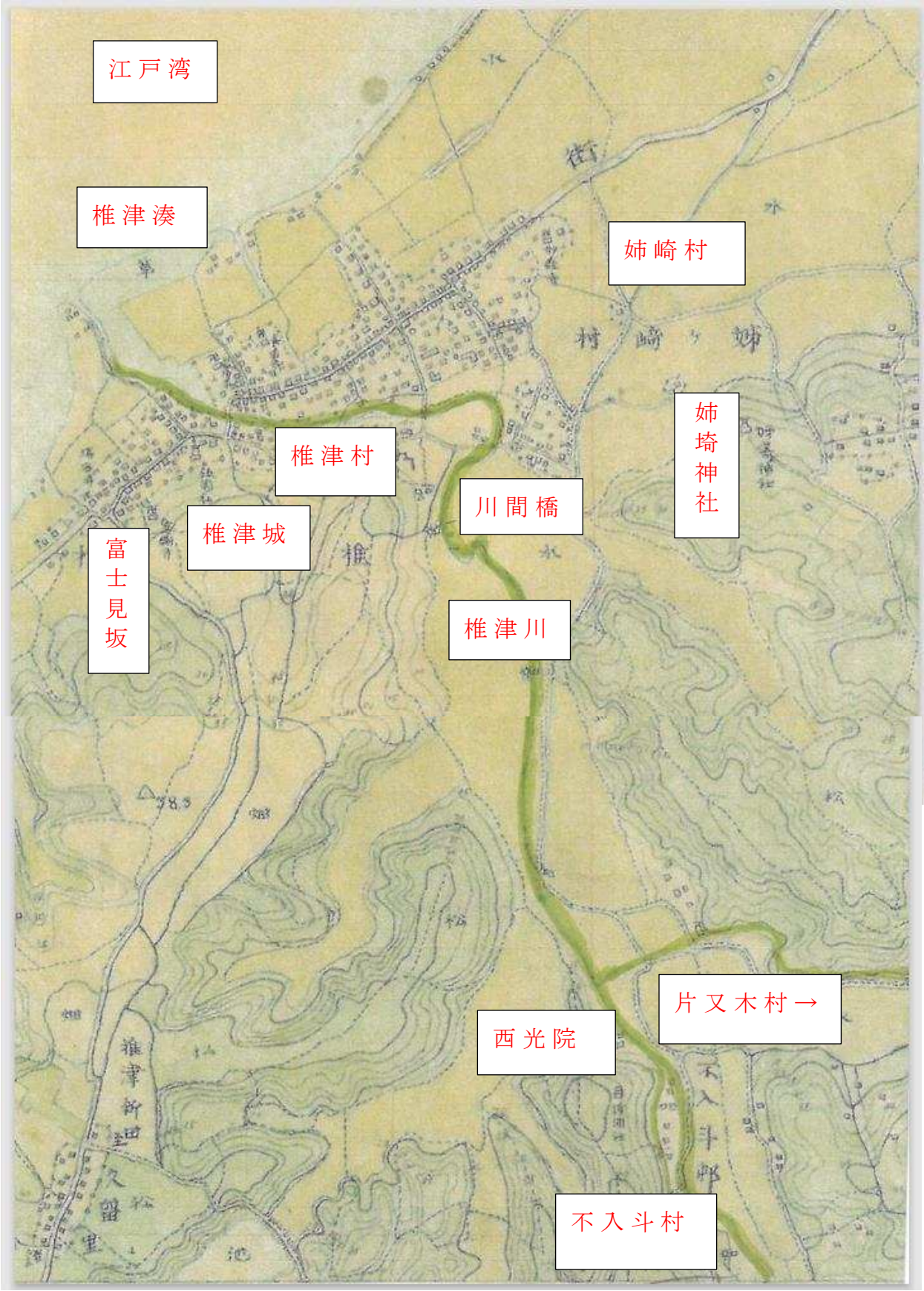
あとがき

最近になってこれらの伝承が公開されたのは、明智光秀の評価が見直されるようになってきたことによるものと思われる。史料が失われてしまったのか、それとも元々無かったのかは分からないが、伝承を裏づける確たる史料は残されていない。

尚、大室氏は重五郎を光秀長子・十五郎と推論している。

参考資料

・大室晃著；「伝明智光秀側室の墓」
・いちはら特派員報告；「「麒麟が来る」の明智光慶のお墓を訪ねて」
・いちはら特派員報告；「「麒麟がくる」の明智光慶とフサの方が暮らした西光院」
・中島道子著；「湖影　明智光秀とその妻熙子」
」

以上（添付地図あり）

○不入斗村周辺の地図